

雪に包まれた白い風景を見ると、私は、温かな懐かしさを覚える。45年以上にもなるというのに、今でも雪国で過ごしたことがよみがえってくる。

雪の朝、寮生に雪踏み当番が回ってくる。かんじきを履き、きしむ雪の声を聞きながら一歩一歩踏む。その雪道から雪段を降りて玄関に入る。雪囲いされた家の1階は昼間でもほの暗く、ほっとした温さがある。信州の私たちは、雪かきをして雪を取り除くが、冬長

く雪に覆われる雪国では、雪と共に生きるしかない。

女子寮からピアノ練習棟は、ほど近い場所にある。ある晩、ピアノ

しきる中を胸まで埋まりながら、どうやって帰ったのか覚えていない。また知人宅を訪れたとき、どことなく景色が違う。迷ったの

読者エッセー

「雪国を想う」

古畑 博子 (66歳・松本市波田)

ノの音がいつになくさ
え響き、外の静けさに
時を忘れて弾いていた。
帰ろうとすると、

知らぬ間に積もった
大雪で道がない。降り

ではありません。北の海にもすんでいたのではありません。「赤い蠟燭と人魚」の一節である。作者、小川未明が旧制高田中学時代に下宿をした家のかいわいを、私はよく歩いた。下宿のおばさんは歩けないほどに下肢が不自由であったという。人魚の原型がそこにあったと思う。未明が聞いた「北の海」の波音。童話で語られる大あらしは、北越日本海のほえる海鳴りであろう。そんな時、ハタハタが大漁という。卵をいっばいにはらんだハタハ

夕を初めて口にしたのも、雪国であった。白過ぎる雪の白さは、やわらかな娘の目を内障眼にする魔性をも秘める。盲目の警女たちが、かつて雪解けを待って門付けの旅に出た雪国に、やがてたしかな春がめぐってくる。女子寮のその名も桜寮といった。思い出の桜寮があった高田城址に、春らんまんと咲く桜をもう一度見てみたいと思う。みな私の心の中に生きる雪国の原風景である。